

(講)(演)(I)

## 禅の眼目

上田閑照

「禅」について何か話をするようにというのが私がいただきました課題です。

しかし、禅は私に語られるようなものでないということが根本にあると思います。

それでは禅について語ることならばできるかといいますが、禅を専門に勉強したということでもありませんので、それもできるとは言えません。

私がどういうように禅に出会って、その時、禅をどういうものとして受取ったか。そして私自身が少し坐禅をしたり参禅したりすることになったわけですが、そういう時に禅をどのように理解するようになったか。そういうことをお話ししてみたいと思います。勿論私が自分自身を語るという意味ではなく、ここでお話出来る可能な仕方という意味です。

私は本を読むというかたちではじめて禅に出会いました。一番最初に出会いましたのが鈴木大拙先生の『禅百題』という本なんです。これは禅の古典的な問答をひとつひとつ生きた出来事に再現するような、そういうかたちの著作ですが、これは私が、非常によく読んだわけなのです。それは私がもう二十八、九になってからのことでした。それから大拙先生のものいろいろな読みましたし、また、そこに出ている禅のテキストなども少しずつ読むようになりました。

比較的早い機会に読んだのが『頓悟要門論』。それは馬祖道一の弟子になる大珠慧海という人の語録です。その中で幾つか、実に面白いなあと思ったことがありますので一、二挙げてみますと、例えばある唯識の学者が禅のお坊さんのところを訪ねます。そして、学者が「これからどこそこへ行く」

といつて去るわけですが、門で別れるに際して禅のお坊さんが庭先にあった石を指して「この石はあなたの心の中にあるか、心の外にあるか」とフツと尋ねるのですね。すると唯識の学者ですから、一切は万法唯識ですから、どうも「それは心の中にある」と答えざるを得ない。すると、その禅のお坊さんの云く、「それはしかしご苦労なこつたな。そんな重い石を心の中に入れて、これからどこそこに行かれるのですか」と。そこで学者が何か感じて、気がついてです。そのままそのお坊さんのところに留つて、ずっと禅の修行をすると、そんな話もあるのです。

こういう話は総て、いわゆる教と禅の関わりをあらわしています。私自身やはり学問をするという生き方でしたから——何かそこに、学問ということでは追つつかない、届かない、ある根本的なことがあるような感じが強くしたわけですから、もうひとつ非常に面白くて、何かというによく話をするのですが。これもここで繰り返してみたいと思います。西谷啓治先生の「我が師西田幾多郎を語る」という文章があります。これは昭和二十六年に出ている本の中ですが、次のようなことを書いておられたのです。「いつだったか、先生のお宅で大拙先生と一緒にすることがある。何かの話の中に大拙先生は「禅は要するにこういふものだ」と言つて、前のテールをガタガタ動かされた。西田先生はそれがよほど面白かつたのであろう。」と。これを読みましてやはり、私の心に

もそのガタガタが大きく響くようでした。何かこういうことが色々非常に強い印象を受けたわけなのです。

そもそもどういふことか色々思つてみるのですが、一番ピツタリ言えることは、やはり自由ということでないかと思ひます。大拙先生も創造的自由という言葉を使つておられます。自由といふとひとつのは、これは大きな概念ですから、既にいろいろの意味がこめられています。私達が普通ヨーロッパの、ことに近代の哲学を通して自由という言葉を受け取る時には、主として自己原因性とか自発性ということ。自由ということが考えられるわけなのです。しかし私が禅に感じました自由は、そういう自由とちよつと違う感じがします。自由自在というか、日本語で言えばそういう方向の感じが強いわけですね。むしろ、開かれて一切のとらわれから脱却して自由、開かれてということが自由、そういう感じ。或はハイデッガーがオッフエンハイト(開け)という意味で自由(フライハイト)を考える時の方向に近いかも知れません。

何か私達のあり方にはどこか根本に、とらわれとか、わだかまりというものがその根がみえないようなところにあつて、私達の存在というか、することなすこと総てがしばられていふ。そういうことが破れて、開かれたという、そういう感じだつたのです。

私の好きな言葉ですが、「放てば満てり」という道元禅師の言葉があります。「放てば」、その時「満てり」といふの

は、そこにある種の無限が感じられるということだと思えます。しかしそれだけでは、感じられたままですのままで又すうと消えてしまいかも知れません。ですから「放って」そこで「満てり」と感じられた無限なもの、それが何であるかを掴むということが、やはり起こってくると思うのですね。そこで初めて「何」ということがはつきり限定されて言えるようになるわけです。限定されてますが、しかし「放てば満てり」という、その感じのままに掴まれた場合には、「何」と掴まれると同時に、元来掴まれないものが消えることのない何かそこに余韻のように響くということがあると思います。

ところが掴むと同時に、そこにある種の逆転というか転倒というか、そういうことが起こってくる。掴むという時にやはり基本的には言葉で掴むことになるわけですがそこにひとつの問題があると思うのですね。それから、掴みますと、そこに誰が掴むか、その掴むものの自分が出て来ます。掴むものとしての我の我が出て来ます。言葉で掴む時、そこに言葉と我性との、ひとつの絡み合いというか癒着のようなことが起こってきます。そこでは、掴まれたものだけがあるものとなり、しかも掴む我が我の存在を確かめるためにますます掴みながら、掴んだものに逆に掴まれるという、そういう事態が起こつて来ます。

こういう事態に立入るためには、本当は言葉という事象を根本的に問題にしなければなりません、この点今日はお話

することが出来ません。ただ一つだけ触れておきたいと思えますが、言葉というのは実に不思議なものだと思ふのですね。言葉は事を表すと基本的に云われますが、その時、ある不思議なことが起ります。言葉は事を表しながら、事の表れと共に言葉としては消えています。そこにはもう事が事としてあるということになります。言葉で言われることによつて事が事として表われ、事があるということになるのです。事を表す時に言葉は、ない事をも事として表すことができます。虚言することができるといふこと自身、言葉の不思議な力を逆に表していると言えます。又フアンタジーのようなことを考えてみますと、言葉で言われなければ有在し得ない事態があります。これは、言葉の創造的な力でもありますが、同時に又危険な力でもあり得ます。又言葉が事を表わす時、言葉の分節構造が表わされる事柄の連関を描き出しますが、言葉としては消えて、事柄自体の連関のように思われてしまいます。以上のような事態に含まれている問題を色々考えてみますと、大拙先生のガタガタは私には非常に面白いことと思われて来ます。つまり、そのガタガタというそのことで、言葉で表されながら事柄がそうだといふふうには我々が思い込んでいるようなそういう我々の世界を一挙に壊すというか、そして壊すだけでなく、もう一度そこに新しく建立する、その壊す運動と建立する運動が一つであるような、そういう根源的な動き、それが感じられます。

大拙先生の言葉で一つ、二つ、それに関するところをみておきますと、一方ではこういうことが言われています。「我らの平常な平和な概念育ちの意識をその根底からひっくり起こしてみないと、真实性に徹することはできないのである」と。そういう方向と、もう一つ「意味はないといっても、いやしくも人間の働きである以上、無意味といえはその無意味が意味でなくてはならぬ」と。これは最初の引用と逆の方向の事柄が云われていると思うのですが。そこに、新しく世界が建立されていく。そういうわけで、私が最初に禅に出会ったのは、本を読むかたちで出会ったこと、その時私を感じたのは、とにかく非常に面白いということ。そしてその面白さというのは、何か私自身の存在の根底をゆるがすような感じで、それは何かといえはやはり自由という言葉で一番ピッタリ言えることではないかという、そういう感じを持ったということをお話し致しました。

しかし私自身の生活はむしろ当時、だんだんちつとも面白くなくなっていく。ますます不自由感がつのっていく。だんだん自分の実際はそういう方向にずつと行って、そのうちにすつかり行き詰まったような感じでした。そういうことがありまして、禅というものをいま大まかにお話ししましたようなものとして受け取っていたものですから、そしていろいろな因縁も重なりまして、自分でもその気になって、坐禅をしたり同時に参禅したり、そういう道に少しずつ触れるよう

になったわけです。

では次に、坐禅とか参禅ということの中で、禅というものをどういうふうに理解するようになったか。それをお話してみたいと思うのですが。その前に、禅の道を自分も歩みたい、あるいは歩もうという気持、これには何か禅が私の道になるだろうということを思わしめるものというか、あるいは私をして信じせしめるものが、やはりあったと思うのですね。それは決して、ただ本を読んで禅というものは非常に面白いものであるとか、あるいはここに自由がありそうだという、それだけではない。それだけでは本当に一人の人間に、禅の道を歩ましめる力にはならないと思います。その禅のいうところが本当であるということを感じしめるもの、それは生きた人間だと思います。現身の人間ですね。一人の人間を本当に動かすことができるのは人間。しかも生きた現身の人間だと思います。少くとも私の場合自分が坐禅や参禅をするというようになつて、だんだんそういう道を更に歩みたいと思うようになりましたのは、事実、現実の人間が私にその道を信ぜしめたということがあります。これはただ一人だけということではありませんけれども、今日は今迄の話と連関して一人だけ、大拙先生のことをもう少しお話ししたいと思います。

実は私は一度しか大拙先生にお会いしたことはないのです。しかし一度しかお会いしたことがないというようには私自身考えられないような仕方、ある決定的な影響を受けたよう

に思います。大拙先生の著作は色々読みましたが、書かれて  
いる事柄以上の何か、生きた真理が感じられるところからの  
影響だと思ふのですが。私が大拙先生のどういふところに深  
く感銘を受けたかということですね。それを一、二、具体的に  
挙げてみたいと思います。例えばこういふことがあります。  
ずっと大拙先生のお世話をされて、仕事の上でも実際に秘書  
のような役を最後までされた岡村美穂子さんが書かれています  
ことです。

「人が信じられなくなりました。生きていくことが空しい  
のです。おさげ髪の一少女のこの訴えを聞いて、先生はただ、  
そうかとうなずかれた。否定でも肯定でもどちらでもない言  
葉だと思いました。が、その一言から感じられる深い響きは、  
私の片寄った心に新たな衝撃を与えたのではないかと思ひ出  
されます。先生は私の手を取り、その掌を上げながら、綺麗  
な手ではないか。よく見てごらん。仏の手だぞ。そう言われ  
る先生の腫はうるおいを湛えていたのです。私が先生の雑務  
のお手伝いをしながら、心の問題と取り組ませて頂いたのは、  
このような環境のことだったのです」と、そういう文章で  
す。勿論これは説明はいらないと思います。

もう一つこんどは少し別の様子ですが、これはコロンビア  
大学での講義のある時、後で、精神医学の専門の人が禅と透  
視的な洞察力の関係について大拙先生に質問し始めました。  
そして「大拙先生が他人の心を見抜くことができるに相違な

い」と言い張って、なかなか退かないということがあったの  
ですね。それに対して大拙先生は「他人の心を知ってどうし  
ようというのかな。大事なのは自分自身の心を知ることだ」と  
言われた、と。それで彼女の質問がそこでパチッと断ち切  
られたわけですね。

それからまた、こういふこともあったといわれております。  
大拙先生が戦後アメリカに渡られ、そして一度帰ってこられ  
た時に、先生の学習院時代の生徒だった人達が先生を囲んで  
集まった会でのこと。「一人の仲間が、よせばよいのに『禅  
の話などアメリカ人に分かりますか』と聞いたものだ。先生  
の答はまことに簡潔で『君達は分かるのかね』。間髪を入れ  
ずとはまさにこのことである。その場に居合わせたものは、  
「その時のことを一生忘れることはあるまい」と。そういう  
ふうにいわれています。

いま読んだ二つのあとの例、これはどちらかという大智  
の働きと云えるでしょう。大智大悲と云いますと仏教の一番  
基本でいうことですが、当の大拙先生自身が西洋の只中で大  
乗仏教の核心をもう一度はつきりと單純に掴み直された時に  
強く出されたことでもありました。

以上のような、人と人との向かい合いの中で期せずして起  
ってくる応対の中に、そこに人間、あるいはむしろ禅の言葉  
で人という、それがおのずから、しかも非常にはつきりと出  
てきていると思われのです。書かれていることは勿論大切

ですけれど、私を信ぜしめるものは、このように人間の生き  
た、しかもたまたまというかたちで自由に出てきた働きです  
ね。

大智大悲と云いますのは、御承知のように、大乘仏教の根  
本語で色即是空と見る。これが大智ということ、そして空即  
是色と見る、これが大悲ということ。禅とは何かということ  
は、昔からいろいろな言い方で出されていますが、一つ基本  
的な言い方として「禅とは禅定から出る智慧である」と言わ  
れております。これは智慧ということだけが強調されている  
ことではなくて、禅定から出る時に、悲ということがそこに  
浸透したかたちで出てくるのです。禅定というのは空即是色  
・色即是空の空ですね。そこから出る時に悲に浸透されて出  
てきて、智慧と悲とが一つになっています。その悲の方から  
云いますと、本当に無に浸透された場合には心が優しくなる  
ということがあると思うのですね。

こういうことも、さつき大拙先生の時に話しましたけれど、  
ある特定の具体的な場で、その場の救いになるようなことを  
本に行うことができるという、そういうことですね。大智  
大悲ということですから、実際にある具体的な行為でそ  
の場のたすけになるような仕方です。智と悲とが一つに働き得る  
ためには、現実の世界の実際の生活の上で具体的な訓練、禅  
で云う日常工夫を經ていないと、本当はできないのではない  
かと思えます。

以上、色々な機縁があつて私として禅というものをどうい  
うものとして受け取ったか、そしてどのようにして自分もそ  
の道を歩んでみたいと思つたか、そこまでの話を  
一応させて頂きました。

後半は禅で云われている坐禅と参禅という基本のことを挙  
げて、それに私の全く個人的なコメントのようなことをつけ  
て、少しずつ進んで行きたいと思つています。ただ、コメントを  
つける時、禅のこととしてというよりもむしろ人間のことと  
してというか、人間の存在、人間の基本的な事態として、そ  
れはどういうことを意味しているかという点に着眼してと。

基本的に、禅ということは行ということと結びついている  
と思つています。勿論行が禅だとは云えないかも知れませんが。

この行ということが一体どういうことか。私達は普通、行動  
とか行為ということ言いますが、行ということとはそれとちよ  
つと違うような感じがするのです。有機的な本能の機制に  
組み込まれている行動の場合であっても、あるいははつきり  
と目的意識を持つて、ある事を実現していく行為であっても、  
それはやはり何の為とということがはつきり言えるわけですが、  
そしてその何の為とすることは、ハイデッガーの言葉で言え  
ば「世界のうちにあることの遂行」になるわけですが。行と  
いうのはそういう行動とか行為と非常に違うと思つています。行  
の内容に関しても、これは修行ということで言えば、宗  
教的なアイデアと結びついた何か特定の定形を持った修行

ということですが、しかし行という時には、それだけに限らないわけですね。人生の経歴の中のさまざまな出来事に出会っていくそのあり方。それも行ということになるし、それからまた日々の生活、それが遂行されていくあり方も、行の立場からは行ということで考えられます。全く舌足らずなことですが、とにかく行ということで坐禅・参禅が出て来ます。坐禅と参禅と云う場合、先ず両者は引き離せないものということを強調されなければならないでしょう。実際の修行の上で言えば、坐禅から立ち上がって参禅へと、また参禅から坐禅に帰ると、いうことの反復ということになるわけですが。その反復自体が行ということであって、どちらかを切り離してしまおうと本当の行にはならないと思います。

その上でまず坐禅からみてみます。身体の基本的なあり方を仏教では、行住坐臥ぎょうじゅうざおと見えています。これは四つの基本的な姿勢ということですが、身体の姿勢ということとは世界のうちにあるあり方の具体と言うことができると思います。どういうあり方で世界のうちにあるかということをも具体的に遂行する、その表現でもあるし、同時に遂行の仕方でもあるわけです。その行住坐臥のうちの坐に原姿勢を置くところに坐禅の前提があります。坐を原姿勢としてそこから行住坐臥の全体が展開されてくる。又、坐におさめられる。これは何でもないようですが、非常に大きな意味があると思います。いわゆる人間学的に、人間存在の優位的特質として直立ということ

が云われます。直立ということが人間の人間たる所以の基礎である、と。そして、直立ということから人間のさまざまな文化の展開を見ていくという考え方があります。これは現在でも動かさない考え方のひとつだと思えます。人間学的優位の事実そのものと見られるその直立ということに対して、そうでなくて、直立を収め取消したようなかたちでの坐ということを人間の原姿勢にするということの意味は、何か非常に大きなものがあるように思います。

私達は普通、「坐る」という時に、日本文化の伝統の中では基本的に三つの坐り方があるのではないのでしょうか。一つはあくらですね。もう一つは正坐ですね。そしてもう一つが坐禅のいわゆる結跏趺坐けつがたせざ（ないしは半跏趺坐）です。

この三つはそれぞれ独特の意味を持ってしていると云えます。世界のうちにいかにあるかという、そのあり方を表しているわけです。基本的に一つの線で三者を見てみますと、あくら、これはやはり楽な形でしょう。それに対して正坐、これは厳密な意味では緊張の形だと思えます。人と人ときちんと対面する時、これはやはり正坐ですね。

あくらが楽な形。正坐が緊張だとしますと、それに対して結跏趺坐、これはやはり、あくらの持つ「楽な」というところと、正坐の持つ緊張というところと一つになっているような感じがします。勿論足を組むのは痛いということが最初は出てきますけれども、結跏趺坐というあり方そのものに入っ

てしまうと、禅の方でははっきり安楽の法門と云われていきます。実際やはりある種の安楽ということがあると思うのですね。しかし、あぐらのような意味での楽さではない。正坐の持つような緊張がはっきりそこにこめられています。私の感じではとにかく安楽ということと緊張ということが一つに融け合ったような姿勢であって、そのこと自身が既に世界の中にある、ある独特なあり方を物語っているように思います。

坐禅は手を組み足を組んで坐るわけですが、これも単純なことですが、非常に面白いと思います。まず、手を組み足を組むということは、文字通り自分自身を一つにまとめてくくってしまうわけでしょう。これは正に集中のひとつの具体化です。しかし単に集中ということだけでなくて、集中した自分そのまま開かれていくという、そういうあり方、具体化だと思えます。それは丁度日本語で「一心に」に対して「無心に」と云いますと、ちょっとニュアンスが違って、「一心に」というところを通して、それがまた忘れられていく。そして事柄が事柄として動いていくという、そういう感じでしょうけれども、そのように、手を組み足を組みという集中の具体化は、集中ということだけでなくて、集中された自己自身がすつと抜けていくという、そこにまた、安楽というところと結びつくところがあるのですね。

更に又、これは手を組み足を組むわけですから、文字通り手も足も使わず何もしないということの具体化ですね。この

こともまた非常に大きな意味があるように思います。さっき云いましたように、人間存在の優位性が基本的に直立にあると考えられますがその場合、直立することによって、有機体的に環境にとじ込められているあり方から抜け出て世界に開かれ、その開けの中で、直立することによって自由になった手をもって環境に手を加えていく、これが人間の文化の基本条件と考えられているわけです。

坐って手足を組むということは、そういう人間の生物としての優位というものを一たんゼロに取めて、しかもなにもしない。何もしないというところまで、もう一度戻すということなのです。勿論これは、何もしないということをするといういわば逆の積極性でもあるわけですが、このするもしないに消されてあくまで何もしないということ。坐禅はこのように何も無いことの具体化です。

しかしその前にもう一つ根本的に大切なことがあると思えます。何もしない以前に本当はどうにもこうにもできないという行きづまりの具体ということ。実は釈尊自身そこからは始まったわけですね。あらゆる宗教的な行や、あるいは当時の哲学を学んで、それでも解脱がかなわない、と。そして遂に、こんどは解脱に達しなければ二度とこの座を立たないという、その決心で坐禅に入られたということが伝えられています。坐禅というのは自発的に何もしないということよりも、もうどうにもできないという、行き詰まりの具体化とし



て本当に出発するというように言えるでしょう。又、坐禅の中で坐禅が進んでいきますと、実際そういうことになると思えます。これは禅の方で疑団とか、そういう言葉で言われる事態は、そのことを表しています。

ところでそのように、どうにもならないという問いそのものの具体化である坐禅が、同時にその坐禅の仕方そのものの中に、もう既に答が具体的に出現しているというか、坐禅の仕方の中に体で具体的に本当のあり方が先取りされているというか、この面が又決定的に大切なことです。そして禅の中で強調されているのは、坐禅の時には目を開けてなければいけないということなのです。

目を開けて、しかし何かを見るというのではなく、明るい開けの中に開かれてある。それは自分が中心になっているような開けではありません。直立の場合も世界が開かれるわけで、そこではどうしても自分が中心になりますね。そしてそれによってその開けも限られて来ます。しかし坐って手を組み足を組みということ、自分が中心ということではなく、ただ開けの中に開かれていると、それだけに無限の開けに開かれているという、そのあり方なのです。これは漠然としたようなことですが、これは決定的な事態だと思います。何ものにも対さない非対立であって、無限の開けの中に開かれているという、そういうあり方が坐禅の仕方の中に身体で具体的に先取りされています。

それから背骨を真直ぐにということが非常に強調されるのですが。これも非常に面白いと思うのです。垂直の方向は、はっきり方向としては保持しています。ということは上下の運動をいわば未然に含んでいる。運動はしないけれども、その運動の方向ははっきり未然に含んでいるということなのです。ですから立ち上がるということができる形をとっている。しかし立ち上がるというあり方は、一旦はっきり零に収められているということなのです。

それから呼吸が非常に大切だということですが、しかし特別な呼吸法でなくてむしろ、自然なすーっと息を出してまた吸うという仕方です。

ある種の行では呼吸する場合に、自分の身体の特定の局所に呼吸を向けて集中してゆくというような、特別な呼吸法を宗教的行として修練するというようなことも実際いろいろあるわけですが、禅ではそのようなことはなく、自然に、然しはつきりと自覚的に、すーっと無限の開けの中に息を吐いて自分を出し切り——死に切り、そしてまたすーっと息を吸って蘇るというような、内と外とのある種の無限の交流のようなことですね。禅では呼吸についても、実際の経験からくる適切な示唆の言葉がいろいろあるようです。例えば、どこで読んだかちょっと思い出せないのですけども、息を吐く時、心の眼で吐く息の行方をどこまでも遠く追っていくというふうな示唆が書いてあったことがあります。

そのような、経験から生れた適切な示唆をもう一つ、「坐る」ということ自体に關してですが紹介したいと思います。

これは確か原田祖岳老師の言葉だと思いますが、何でもないやさしい、しかし実にピッタリした言い方だと思えますが、それは、「ゆったりと、どっしりと、凜然と、東海の天に富士山のつつ立つように」というのです。

「ゆったりと」ということと「どっしりと」ですね、そして「凜然と」。凜然というのは、はっきりと背骨を立てるということと結びついています。そして全体が「東海の天に富士山のつつ立つように」。「凜然と」といっても一直線の緊張とは違うのですね。体だけのことではなくて、大地からすーっと盛り上ってきわまってゆく。しかしそれがやっばり「ゆったりと」ということですね。集中の具体化ですが、集中されたところで緊張が抜けていくというのか、坐禅している当体にとってはあくまでも無相ということなのです。

以上のように坐禅が行ぜられるわけですが、その「行」ということについてもう一点だけ触れて、参禅の方に進みたいと思えます。行ということですから、しかし修行主義（修行によって何かを達成しようとする自力の立場）ではないということとを禅自身が注意していることは大切だと思います。禅独特の言い方で色々言われていて非常に面白いのですが、一つは、坐禅しても何もならんと坐禅の無用性が逆説的に強調される仕方。もう一つは、坐禅しているそのままだが仏のあり方だと、

仏になるということ、これは不可能なことだと言われるこういう方向があります。或は「行じて行せず」とか、「修して求めず」とかズバリと云われるのも、行が修行主義でないことを示しています。

参禅のことに触れませんか坐禅のことも片寄ってしまいますし、以下参禅について少しお話ししてみたいと思えます。

参禅という言葉自身は広い意味で使われる場合と狭い意味で使われる場合とあるようですが、広い意味とは、一般に禅に参ずるということ（この意味では坐禅も参禅）。しかし私からこれからお話したいと思えますのは、臨済宗でいうところの狭い意味での参禅です。実際の行の形態で云いますと、師家からいわゆる公案を課せられて、そしてそれに対する見解をもつて、即ち自分自身が答になつて師家の前に出て点検を受けると。そのような行の形態のことです。

参禅についてお話ししてみたいと思えますのはその行態の具体的などころではなく、坐禅から立ち上がって参禅へというそのとこに起こってくる出来事に着目してみたいと思うわけです。

さて坐禅から立ち上って参禅するわけですが、先ず坐禅から立ち上がるといふことがあるわけですね。仏教の基本的な術語では入定に対して出定といわれていることですが、勿論坐禅から離れるということではなくて、坐禅そのものがこう動き出す、そういうことだと禅では教えられています。とにかく、

坐禅から立ち上がるということがあります。その時、そこにある新しい出来事が起こります。第一、何もしないということが坐禅でしたし、そこでは何事もありません。そこから立ち上がるということですから、そのこと自身、これは大きな原初の出来事ということが言えます。そのようにして一たん根本的な出来事が起こると、その中でいろんな事が起こって来ますが、私はそこで人間の事柄として最も基礎的なこととして二つ着目したいと思うのです。

一つは、坐禅から立ち上がると同時に對するものがあるという、そのことです。坐禅は何ものにも對さないあり方でした。何ものにも對さないという仕方では無限の開けに開かれる、そういうことだったわけですから、立ち上がると向い合って對するものがあるということ自身、これは根本的に新しい出来事です。

もう一つは、坐禅から立ち上がるとともに世界内存在となります。坐禅から立上った主体は自らを世界の内に見出しません。シェーラーやハイデッガーの言う意味での人間存在に對しての世界ですね。単純に包括的な意味空間と云ってもいいでしょう。一つのまとまった世界連関です。しかも世界の内にあるという時に——ここがシェーラーやハイデッガーが見たところと違うところですが——そのこと自身が坐禅において開かれた無限の開けのうちにある、と。ですから、世界の内にありつつ、世界を超え包む無限の開けのうちに同時に

あるという仕方です。世界というところで云いますと、世界が二重になつていような——二つの世界という意味ではなくて、世界が世界としてもう一つ無限の開けに包まれていふと言つたらいいのでしうかね。このことは世界の内にあり方にある決定的な質を与えることになります。

そして、さきに対するものがあると言いました時の對する場がいまの世界ということですから、その世界が無限の開けに包まれたような世界であることは、「對する」あり方の質をも獨特に決めて来ます。以上、着目したい二つの点をあげましたが、実際はつながり合っているわけです。以下、その二つのことについて、もう少しみてみたいと思います。

まず、對するものがあるということからもう一度始めてみます。坐禅から立ち上がると同時に對するものがあるわけですが、その對するものがどういふものとして出会われてくるか、それは、さしあたってはっきり言えますことは、坐禅あるいは禅定の深さと結びついている、ということですが。我々の日常の世界の中では一人の友達であるその人が、深い禅定から立ち上がって出会われる時——仏教の言葉をここでいふべんに使つてしまいますと——菩薩として出会われるということも大いにありますね。「何として」は意味世界の連関内だけでなく、これは禅定の深さと関係して思ふいます。これは決して禅から見てというだけのことではないと思ひます。抽象的に云えば、意味連関そのものももう一つ

云わば深さの次元、奥行きに開かれ得るということです。我々の日常の世界の中では一本の花としか見られないものが、その中に神が住み給うと二神秘家が言う時、それはひとつの表現ですが、花が何として出会われるかという、その「何として」があらわれる地平に深さが結びついているわけでしょう。以上言いたいことは、いまのように立ち上がった時に對するものがあつて、その對するものがどういうものとして出会われてくるかということとは禪定の深さと相關的である、ということです。

對するものがあるというところで原初の出来事としてはまず礼拝があります。これは行態における實際でもそうです。禪は礼拝しないじゃないかというような話があつたと聞きましたが、そんなことはないと思います。實際僧堂での生活に於て礼拝は一つの根本行になつてゐると思ひます。坐禪から立ち上がれば必ず礼拝をする。しかしその時に「お前さんは仏さんに礼拝してゐるのか」というようなことを誰かが尋ねるとしますね。そうしましたら、そこでは様々な答が可能だと思ひます。「礼拝しない」という答もあるでしょう。又古典的な例を一つ挙げれば黄蘗の答、「仏について求めず、法について求めず、ただ礼拝することかくの如し」ということです。これなども非常に面白いと思ひますね。やはり礼拝する時は、何というか、一種の只管打坐という言い方にあわせて言えば、これは只管礼拝なのです。そこでは礼拝ということがあつて、

それがその場合のまず最初の、しかも総てであるような出来事でありませぬ。これはやはり立上つて、對するものをもう一度はつきり、自分を無に返して、そこからあらためて受け取り直すという。そういうことです。もし宗教学の言葉を使えば基本的な儀禮と言つていいかも知れませぬ。

次に問題となりますことは、礼拝だけで総てなのですが、しかし又そこから色々なことが起つてくる。すると礼拝しただけでは、済まないということになります。對するものがあるという基本的な事態を受け取るのが礼拝ですけれども、對するということそのことは、実はそれ自身既に大きな問題を含んでゐます。何故かという、對する時に向かい合うものがあるわけですが、その向かい合いの一番基本、原態とでもいふと、それは自己と他己、自と他というかたちの出会いになります。これは自己と他己、自と他というかたちの出会いになります。どういふことかといふと、結局自分でない他者を他者としていかに受け入れるか。しかもその時に、自分は自分としてはつきりとなさなければいけないのです。そのどっちかがなくなつてしまつと、自他ということにはならない。ですから自他が出会うといふことは、あらためてはつきり、自分でない他者を受け入れつつ自分は自分だ、ということがその現場で都度はつきり出されなければならぬ。

あるいは飛躍的に別の言葉で言えば、自と他の出合いの時には最初から、「一体お前は何ものであるか」と、そういう

ことが問われているということですね。自分はこういうもの  
であり、ということがはつきりそこへ出せなければなら  
ない。その時に同時に自分でない他者を受け入れたかたちで、  
しかも他者に依存しない私というものが出せなければなら  
ないということですから、これは最初から非常に大きな問題と  
してのシチュエーションです。

あるいは自と他の出会いは最初から——問答的であると云  
えると思います。あるお坊さんが六祖慧能のところに尋ねて  
きて、そこで修行したいというふうに挨拶した時に六祖が、  
「何ものか恁麼に(そのように)来たる」と問うたわけです。  
「こうしてわしの前に現れてきたお前は何ものであるか」と。  
そう問うたというのですが。これは禅の問いというより、人  
間と人間が出会った時に起こる基本的な問いだというように  
言うことができます。その基本的な問いを禅が問答という仕  
方で遂行しているのだと理解していいでしょう。

しかし自と他の出会いはそれだけのことではありません。  
立ち上がって向かい合っているということは、世界の内で起  
るわけですから、自他の間には世界の事があります。坐禅の  
時には何も事のない無事ですね。それに対して立ち上がって  
向かい合う。しかも、世界の中で向かい合う。その時、自他の  
向かい合いと、事に関わるということがそこに噛み合ってい  
る。自他が事を挟んで対するというように。いずれにしても、  
その事をどうするかということが双方にとって問題になるよ

うなかたちでの事なのですね。

ですから、自他の出会いが最初から問題を含んでいるとい  
うことの中には、双方が互いにお前は何ものであるかという  
間と一つに、世界の事が双方にとって問題であるそのような  
間が含まれています。或る禅匠は出会い頭に「これ何ぞ」と  
問うたと云われます。つまり世界が成立すると同時に事が問  
題になってくるその問題としての事、世界の事を一丸に一挙  
に問いにしているものですね。これも禅の変った問いとい  
うよりも、我々が世界のうちにあるということ自身が問題であ  
るということ、それをそういうかたちではつきり出す、それ  
が禅の問いだと言うことができるのではないかと思うのです  
ね。

以上、坐禅から立ち上がった時に対するものがある、と。  
対するという時には、対する場である世界の内にあって、そ  
の世界の事が同時に問題である、と。そういうところから、  
禅問答のようなことが事実行われ、又、行態としても参禅と  
いう形態が成立したわけです。

その世界ということですが、坐禅から立ち上がった時に、  
そこに、その世界がいわば二重になっているというような云  
い方をさきに見ました。ハイデッガーの言う意味での世  
界内存在の世界がもう一つ、ある無限の開けに包まれている  
ような、そういうイメージで見たらいいかと思うのです。

それに関してただ一つ、要の点だけ触れておきたいと思

ます。世界というのは包括的な意味の場ですから、現代の哲学での一つの云い方では「経験の地平」といわれています。

つまり何を経験するか、その「何を」ということがそこで意味づけられる、ひとつの地平として世界というように考えるわけです。この見方から出発してみますと、勿論この場合地平というの、その地平の上に現れてきたものだけが我々にとって存在するものですね。そしてそれが、何であるということが言える意味の場です。勿論その地平というのはこちらの位置に応じてさまざまに動くことができます。しかし世界という限り、それは、ひとつの経験の地平をなしているわけですが。原理的に考えてみますと、地平にはどこまでいっても地平のかなたというものがあるということを私は強調したいのですね。我々が出会うものは地平のうちで出会うけれども、そもそも地平ということが可能になるためには、「地平のかなた」ということが同時にあるからです。我々があるものに出会う時に、何であるかはその地平の内であるけれども、「地平の彼方」の奥行きがある限り本当に何であるかということが分からないわけですね。しかしこの場合それが何であるかが分からないというのは、智の制限ではあるけれども、むしろ経験の深さでもあるということです。

世界ということをいう場合に、何らかの仕方では世界を超えたものが一緒に問題になると思いますが、これは必ずしも一挙に宗教で云われるような超越者とか絶対者というふうに考える必要はありません。私達としてはむしろ、超越者とか絶

対者とか云われるものが人間の経験にあらわれてくる必然性、それを理解することが大切さだと思ふのです。世界が哲学的に例えば「世界」地平と云われる場合、地平と「地平の彼方」の重なりが縦とか深みの次元とか、あるいは神学などで水平に対して垂直という、その垂直、そういうことになってくると思うのですね。図式的に水平に対して垂直というのは、突然のようにみえますが、水平に対して垂直ということの必然性、それは水平という時に既にそこにあるというように言えると思います。更にもう一つ。水平とか垂直とか、神学などで好んで使われるビクチャーになっていますが、水平とか垂直とか、そもそも言えるためには、水平とか垂直とかということ自身の場というものがもうひとつはつきりしなければならぬと思います。その場は水平でもなく垂直でもなく、総じて平面ではなく、イメージで言うとな無限球のような或は虚空のようなそういうものになってくるように思います。そしてそのような場が経験の場になること、そのような場にそもそも開かれてゆくこと、もう一度云えば、坐禅はその一つの道と言えらると思います。

以上、禅ということを私なりにどう理解しているかということをお話しました。私としましては、そのように人間としての基礎的な事象から考えることによつて、例えば禅と念仏とか、もう少し拡げて仏教とキリスト教とか、そういう問題を考えてゆくことが出来るように思われる次第です。

# 討 論 (I)

討論者 西村 恵 信

上田先生は「放てば満てり」という道元の言葉をおっしゃいました。ちょっとひっかかったことがあるのですが。放てばそこにある種の無限が感じられる、それだけではなくなるので、「それは何であるか」と掴むのだと。「何だ」と、こゝろと無理にそこを絡んでみますと、「放てば」というところまではよくて、それだけではなくなるから、「何だ」とそれを掴んでいかないと禅にならないと、ね。すると、この「満てり」というところが言葉にあたりますか、ということがひっかかったのです。私が自分で理解していることであると、「放つ」で充分ではないかと。つまり放つということが言葉そのもの、と。つまり言葉というのは放つところにもう。禅にむける言葉というのは、そういうことじゃないかと思うのですけれど。そこが先生の場合は二段になっておりまして、ある種の無限が感じられるとおっしゃるところと、その無限

というものはやっぱり具体的なかたちをもって、しっかきぎゅっと把握されなければいけないと、いうような趣でおっしゃっておられますが。禅という無限というものは、そういう具体性と別なるものかなあと、いうところにひっかかりましたので、またお教え願います。

逆な言い方をしますと、先生自身のお言葉として僕は非常にこれはいい意味でいいことをおっしゃるなと思いましたが、無に浸透すると心がやさしくなるとおっしゃった。これで「放てば満てり」ということはこういうことでないかと思えます。場合によると、心のやさしさというところで言葉というものが、そないにわざわざ必要になるのだろうか、ということです。もっと言うと、禅において言葉というのはどういう役割を持っているかということですが。

言葉も「放てば」というところに属するのではないかと思えます。だから、「放つ」というところは、その放つという

ことが充足ではないのだろうか、と。そこへ言葉というものをあらためて要求しなくても、「放つ」ということが既にいっばいふくらんでいると。禅の言葉というのはむしろ、そういう放つたところで言われているのではなからうかと、それから坐禅と参禅は、本当に先生ならではの分析で、非常にまとめていいお話を聞かせて頂きました。もう何も言うことはできません。

そして、坐禅をしていることが仏である。しかし仏になることは不可能であると。これは恐らく道元を指しておられるかと思いましたが、曹洞宗の方にお尋ねしたいことは、修行の、あの臨濟つたらしいあの修行ですね。棒で叩いてですね、夜も寝ずにどうあってもやるというような、ああいうことはどういう意味が本当にあるのか。単なる儀式なのか。宗教的な深い意味があるのか。

この頃多くの人によって言われている、そういうひとつの思想化されたものとは別の、何か厳しいものがかつてはあって、それが意味を失っていくような状況をみていて、禅はそういうことじゃない。もっと違うレベルのことかなあとか、そういうことかなあとか、いろいろ思われてきます。

それから禅には京都学派のような、説明の定パターンを蹴飛ばすものがどうしてもないと。説明していると結局そこへ行ってしまおうように思っています。それが僕の言葉で言うると実体化してしまつて禅になるのではないかと。

禅は純粹經驗を説明されねばならぬと西田さんがおっしゃったそのことの意味はどうなるのか。本当に説明をされねばならないのか。あるいは説明したあととパーンと蹴飛ばすところが最後なのか。蹴飛ばした意味を説明するのかと、いうところを先生はどのようにお考えになりますか、といったようなこと。どうも本当に。

花本貫瑞老師著

## 金剛經に学ぶ

頒価 一、二〇〇円

花本貫瑞老師著

## 金剛經に生きる

定価一六〇円 送料二〇〇円

発行所 中央仏教社

秋田県河辺郡河辺町和田